

Title	[書評] V・H・メイヤー著「四人の詠懐詩人 -阮籍・陳子昂・張九齡・李白による連作詩集の索引-」
Author(s)	道坂, 昭廣
Citation	中國文學報 (1989), 40: 156-166
Issue Date	1989-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/177452
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書 評

V・H・メイヤー著『四人の詠懷詩人——阮籍・

陳子昂・張九齡・李白による連作詩集の索引』

アリゾナ州立大學アジア研究センター

一九八七年 二四〇頁

Four Introspective Poets.

A Concordance to Selected Poems

by Roan Jyi, Chern Tzy-arng,

Jang Jeouling, and Lii Bor.

Victor. H. Mair

曾て吉川幸次郎博士は『阮籍傳』（全集第七卷）において、阮籍の詠懷詩を中國で最も調子の高い詩と稱された。それはその詩が自分の心情をみつめ、題材にしている爲である。自分の内面の感情を連作という形式を用いて歌うことは阮籍に始まる。

『四人の詠懷詩人』と題されたこの本は、阮籍の「詠懷

詩」八二首と、彼に續いて詩の連作により自分の心情を表現した、陳子昂「感遇詩」三八首、張九齡「感遇詩」一二首、李白「古風詩」五九首を取り上げている。

本書の構成は次のように爲っている。

一、緒 論

二、序 論

パート1

三、詩の英譯

阮籍—陳子昂—張九齡—李白

パート2

四、語句索引の分類の見出し（註・大分類）

五、分類された語句索引

六、詩の中での分類番號のつながり

七、詩の句數のパーセント

「この本の後半を占めている分類された索引が、実際にはこの本の存在理由である。」（緒論）と著者が明言される

ように、この本の中心はパート2の五、分類された語句索引にある。それは本書を構成する各項が、總て（パート2の七を除き）パート2の五と関わっていることから見ても取れる。

緒論・序論は本書の構成と共に、目的を語る。言い換えればこの索引作製の理念を述べている部分である。この部分を利用して本書全體の紹介をしておきたい。

まず、著者は中國の詩を、社交・邊境地域などでの戦争といった、廣い意味での社會にかかわる詩、自然詩、友情の詩、主に悲戀である愛情を歌う詩、遊仙など仙界をあつかう詩、不遇を訴える詩、風刺詩の七つに分ける。その總てが西洋的な觀點からすると深みに缺けるが、この四人は例外だとし、その理由として彼らの詩が内省的であることを指摘する。（序論）

さらに彼らの文學史上の位置と四人を一つの集團とすることの妥當性について言及される。著者は序論で、彼ら相互の關係について『唐詩品彙』に載る李白「古風」（卷四）に對する朱熹と劉克莊の評（阮籍・陳子昂・李白の三者に

ついて述べる）、『唐詩別裁集』の陳子昂「感遇」（卷二）の註（阮籍・陳子昂について述べる）を引用される。さらに評者がつけ加えれば、『唐詩別裁集』の張九齡「感遇」（卷二）の註も陳子昂と張九齡の關わりについて述べている。著者は彼らの文學が一連の繋がりを持つことを、過去の諸家の指摘によって證明する。確かに彼らは相互に影響關係を持ち、また内省的な詩人たちである。しかし、彼らだけを中國における内省的な詩人とされることに、評者は疑問を感じる。少なくとも阮籍に倣い、連作により自己の内面を歌ったのがこの三人だけでないのは指摘できるのではないだろうか。例えば陶淵明「飲酒」二〇首、「雜詩」一二首や庾信「擬詠懷」二七首などは容易に思い浮かぶであろう。このような詩人の存在、殊に内省的な詩人ということに關して、前者に全く言及がないのは、メイヤー氏が讀者として豫想された、中國文學研究者、比較文學研究者、一般の文學愛好者の三者（緒論）、特に後の二者に對して中國文學の紹介を兼ねるという意識をお持ちなら不親切だったのではないだろうか。もちろんこのことは、彼ら四人の詩

人の相互の文學の共通性をより精密に探る方法として、この索引を作製したという本書の價値を減ずるものでは決してない。

本書の紹介を續けたい。パート2の六は、それぞれの詩をパート2の五の分類索引の項目番號で表わした部分である。詩の意味の絡がりを示すために、索引の番號で詩を復原している部分である。一見無味乾燥な數字の羅列のようではあるが、對句の意味の構成要素の調査などに大變便利である。だが何よりも、パート1の三、彼らの詩の英譯と重ね合わせると、索引項目の意味がよりよく理解できると思われる。その爲もあり、英譯は原詩との對應を第一の原則とし、文學的であるよりも直譯を旨とすることが宣言されている（序論）。しかし後に一例を舉げるように、評者には若干語句の所屬する索引項目と譯とがずれているように感じられる部分があった。

以上のように本書は分類索引を中心に、それをよりよく使用し、よりよく説明する爲に構成されているのである。そしてそのうえでこの索引によって「四人の相互の關係の

細かな調査」（序論）を行なおうとするのである。

この分類された語句索引について、著者は「アルファベット順や部首によって捜すことの出来る便利な索引とはなっていない。」（語句索引の分類の見出し）と、この索引が從來の一字索引とは全く異なる形式であることを明らかにされる。索引は二六項目の大きな概念のグループがあり（パート2の四）、その中に合わせて二四七に分けた意味の項目を立てる。そして四人の詩の語彙は意味別にそれぞれの項目に纏められる。抜き出された語彙は誰の何首目の詩かを示すために、阮籍はR、陳子昂はC、張九齡はJ、李白はLとし、番號を後に附す。例えばR1とは阮籍「詠懷詩」の第一首の中の語彙であることを示すといった具合である。こういう方法により、四人の詩を別々に考察するのではなく、いわば一九一首の一つの連作詩集として、彼らの語彙の共通性とともに、それ以上に言葉の奥に潜む意識の共通性を探ろうとするのである。

「表題の索引（註・二六の大分類の項目）を読み、それから細かな調査の項目を選ぶ。」（語句索引の分類の見出し）と、

著者は索引使用の方法を説明される。

パート2の四の大分類の項目は、例えばⅡ「自己と社會」、Ⅳ「人を驅り立てる衝動や衝撃」など興味をひかれるものもあれば、Ⅶ「肯定と否定」、XXⅣ「動物群」、XXⅤ「植物群」などそこに含まれる小項目（パート2の五）が豫想しやすいものもある。その反面、Ⅻ「世の中の人間」とⅩⅩ「人間の付屬物と活動」、ⅩⅢ「時間」とⅩⅤ「過去・現在・未來」のように、大分類の項目からだけではその含む意味の範圍を理解しにくいものもある。

もちろん大分類は幾つかの概念を包括しているのであるから、多少漠然としてくるのは仕方のないことである。だがそこに含まれる小項目を見ても、ⅩⅢ「時間」に（一四七）〈朝・夕方〉、（一四八）〈夜〉、（一四九）〈晝〉や（一五二）〈季節〉の項目があるのは理解できても、（一五三）〈時間の單位・日付〉と、ⅩⅤ「過去・現在・未來」の（一五九）〈後の時代〉との區別など、やや分かりにくい點が残る。具體的に（一五三）には「萬歲」「千秋」「丁亥」が、（一五九）には「後世」「季葉」といった言葉が所屬することを調

べて初めて、項目の意圖が理解出来る。しかしこのことは、むしろ著者が最初に項目があつてそこに言葉を分配していったのではなく、言葉を分類してゆくなから項目を作り出してゆくという、詩の言葉の分析を誠實に行なわれたことを暗示するもののように思われる。いずれにせよパート2の四、大分類は確かに四人の共通性を探る一つの指標ではあるが、あくまでも調査の準備段階において役立つものである。その意味ではこの部分もまた、パート2の五をよりよく利用する爲に存在しているといえよう。著者も「讀者がその（註・分類項目）個々の要素（註・語句）の間の複雑な相互關係の完全な意味を獲得できるのは、ただ與えられた項目のなかの總ての言葉を讀み通すことによつてのみである。」（語句索引の分類の見出し）と説明されている。要するに、引くことを期待して作られた索引ではなく、項目と項目に所屬する言葉を讀むことを期待した索引なのである。パート2の五の二四七の項目は、「中國の思考と價值に基づいて決定した」（語句索引の分類の見出し）とされる。出来る限り言葉の持つ意味を尊重して項目は立てられたので

ある。また、この項目中に分類された言葉は四人の詩のなから、詩における意味と含意とを優先して採り出されているのである。つまりこれは機械的に分類配當して作られた索引ではなく、製作過程において強く著者の詩に對する考えや解釋が反映された索引なのである。ゆえにこの索引は著者の四人の詩人に對する論考とみなすこともできるのである。

メイヤー氏の作製されたこの索引について、具體例をあげつつその特色を紹介したい。

阮籍「詠懷詩」五八(即ち、R五八。以下同じ)に「非子爲我御」の句がある。メイヤー氏は「非子」を(一五)「人物」ではなく、(一七七)「運搬・旅の方法」に所屬させる。同じく(R三二)「伶倫」は詩に於て樂器を演奏する動作として用いられている「弄」(L五五)や「彈」(R一・L五五)とともに(一八〇)「音樂」に採られている。これは含意によって分類された例である。一方詩のなかでの意味によつて言葉が分類されているということを端的に示すのは次の例である。「烈烈有哀情」(R六一)の「烈烈」は(一〇

四)「悲しみ・悲哀」に、「烈烈褒貶辭」(R六〇)は(一一一)「立派な・勇猛心・嚴格な舉動」と別の項目になっている。このように同じ言葉が別の所屬になっているもの他に「聲色」がある。(R四)は(三七)「肉欲の喜び・放蕩」に、(R七七)は(八四)「調和・類似と相違・一致と不一致」に分屬している。「傀儡」もまた(R一〇)は(七一)「強要する・暴力」に、(R七七)は(一三九)「争う」に分けられている。

項目についても少し言及したい。(二四〇)「植物」と別に、著者は(二四一)「桃李」を立項される。これは(一一)「なく」や(二四四)「芳香」などの項目とともに、著者の索引作製の意圖を強く反映している。これらの項目に採られている言葉、例えば「桃李時」(C二六)に代表されるような、彼らの「桃李」という言葉に込められている意識をみると、全十三の用例から、「彼らがはかなさに心を惹かれていた。」(序論)と、四人の共通性を指摘されることに納得できる。また(二三)「修辭的疑問」は四人の詩に用いられる全ての疑問の言葉が集められ、その数の多さ

は「彼らは過度に修辭的疑問を好む。」(序論) という指摘に對應している。これらの指摘は一字索引では氣付くことの難しいことであり、この讀む索引の優れた成果である。

さらに、四人の詩の數の差が大きいことを考慮し、四人共通という枠組みを取り去り、彼らのうちの二者或いは三者の共通性を示すものを捜せば、さらに幾つかの項目を擧げることができる。例えば(二二八)〈廣大な空間・開いた空間〉は「八荒」(R三九・七九・L四三・四五)や「曠野」(R一六・一七・五四)などの言葉をとるが、すべて阮籍と李白だけで占められ、彼ら二人がある種の共通する指向を持つていたことを示している。(二八九)〈王朝・王國・皇帝・王・君主・首都とその境界〉に屬する「咸陽」(R五・C二一・L八)は皆華やかな都會のイメージを盛り込んでおり、言葉とイメージの共通性を追求するという本書の目的を具像化した言葉である。

このようにこの索引は著者のねらい通りの成果を示す項目を持っており、優れた特色のある索引である。しかし同時にこの特色が索引の問題點の原因にもなっているように、

評者には感じられる。

先に述べたように著者はこの索引により「(彼ら四人の) テーマとイメージが繰り返されることに注意を促す。」(序論)ということを用意されている。テーマとイメージ、つまり彼らの詩の中の言葉の意味の共通性について、二四七項目のうち、評者が数えたところ、同一項目に四人全員の詩の語句が所屬しているのは一〇七項目あった。彼らの詩の數の差の大きさを考慮すれば、この數は著者の意圖を成功させたと言えるかも知れない。だが一〇七項目を検討してみると、四人の共通性を示すというより、極めて一般的な意味や概念であるがゆえに、全員の詩の語句が所屬したと考えられる項目もある。

例えば主に動詞となる言葉が所屬する項目、代名詞や名詞が所屬する項目の一部などを擧げることができる。(五)〈告げる・話す〉は「言」(R三四・J七・L二五・三二)や「自言」(R七九・C三四・L一八)といった言葉が所屬している。(六)〈聞く〉は「聞」しか所屬する字が無く十二例採っている。他に「見」や「望」などを採る(三八)〈見

る、「去」を代表とする(四三)〈行く〉、これに對應する(四四)〈来る・到着する〉、(一四二)〈飛ぶ〉、(一七〇)〈増加・加える〉、(二四六)「生」「發」「起」が大部分を占める〈開ける・始める〉など。また「我」「吾」を筆頭とする(一二三)〈一・二・三人稱〉、「黃」「朱」から「五色」まで色を總て集めた(二二二)〈色〉、(一七八)〈馬〉、(二二四)〈雲〉など。これらの項目に屬する言葉は極めて一般的な語彙であり、これらを以て四人の共通する特色とはできないであろう。さらに、四人の共通性を暗示する項目であっても、四人だけの特色とは考えにくいものもある。メイヤー氏は「沈みゆく日は彼らの一般的テーマである。」(序論)と指摘される。ただ、落日の項目はないので、(二四七)〈朝・夕方〉のなかの「日夕」(R二六・五三・五五・七七・七九・八二・索引には脱落しているが三七)、「日暮」(R一七・J一〇・一二・L八)、「日西」(L二八)、「西傾」(R二四)などを指しておられると思われる。だが今假に、落日を含めその時間を示す「夕」を評者の手近にある索引で調べてみると、謝朓一八(内一は「夕陽」)例、宋之問二二(内五は

「夕陽」)例、王昌齡一六(内二は「夕陽」)例を数えることが出来た。これでは四人だけの特色とは言えないのではないだろうか。他に「美人」「佳人」「傾城」などの言葉が所屬する(一九)〈女性たち・そして彼女らの行爲・身分〉、(九三)〈明り・輝き・光〉、(九四)〈暗闇・影・薄暗い〉も「耀」や「榮」、「幽」や「冥」及びその熟語が所屬し、その用例を考えると彼らの共通性は浮かび上がるが、彼らだけの言葉とは考えにくい。(一一五)〈懷古・旅愁〉、(一八八)〈都市・町・場所・方向・中國とその細分〉、(一八九)〈王朝・王國・皇帝・王・皇主〉も前者は「九州」を始め地名が、後者は先の「咸陽」など首都や「燕」「趙」など國名が採られる。これらも、彼らに共通する感情の雰囲気は感じさせられるが、彼らだけに特別にあらわれる言葉とは考えられない。(二二五)〈風〉も同様である。

この二四七の項目の中にも、項目の含む概念が廣すぎたり、項目間の區分が不明確になっているものがある。(二二〇)〈川〉は「三河」「汧渭間」を取る。だがこれは川の流れている地域を指しているのであり、この項目の範圍を不

明確にし、「江南」(丁七)や「雲夢林」(C二八)が入っている(二八八)〈都市・町・場所・方向・中國とその細分〉と混亂する。(二二五)〈山・丘・土堤〉に「射山阿」(R七八)、「射山」(R二三)が、(二四〇)〈植物〉に「建木」(R二六)「射干」(R二六・四五)が所屬する。一方(二二九)〈仙界〉も「蓬萊山」「崑崙」や「崑山」、「崑丘樹」を採り、仙界の山や植物が所屬することを示している。これらは著者が明らかに所屬を間違えられたと思われる幾つかの言葉(二二)〈泉・池・湖・小川・急流〉にある「九阿」(R八二)、「(二五二)〈季節〉にある「焦」(R三三・「誰知我心焦」と「寒門」(R六六)、「(二七三)〈食物と飲み物〉にある「憑几」(R五三)と「几杖」(R五七)などとともに、索引項目が含む範圍を曖昧にしまったのではないだろうか。

しかし、この問題で評者が最も残念に思うのは、(二五)〈人物〉と(一五二)〈季節〉の項目である。前者は〈高位・中位・下位・高位と下位〉と人間を一括して纏めている。「仲尼」「老聃」等「聖人」「君子」から、「輕薄」「富貴」「工言子」まですべてが含まれる。だが詩人達の人物

評價や人生觀を知る爲には、つまりより明確に彼らの共通性を知る爲には、この項目は大きすぎたのではないだろうか。後者も同様に、春夏秋冬にかかわるすべての語彙がここに所屬しているが、やはり四つに分けるべきではなかっただろうか。少なくともそうすれば、秋か冬に所屬可能な(二二七)〈雪・霜・露〉との混亂、例えば「霜」の熟語のうち「秋霜」(R一二・L三七)だけが、(一五二)に配されるといったことが避けられたのではないだろうか。

以上の疑問は分類項目に對するもので、完成した索引に對する疑問であつた。次にあげる二つの疑問は所屬している言葉への疑問であり、索引の製作過程に對する疑問である。この疑問について、四人のうち最も詩の數の多い阮籍の詩を主にして指摘してゆきたい。

第一點は詩における意味の纏まりのとらえ方についての疑問である。詩句の中から一つひとつ意味の固まりを取り出すことはこの索引の出発點である。だがその取り出し方に統一性と慎重さがやや缺けているように感じられる部分がある。

例えば使役の取り扱いを挙げると、(一〇四)〈悲しみ・悲哀〉に「令人悲」(R 二一・六二)、「令心悲」(R 二四)、「使心傷」(R 七九)と「使」を無視して「心憂」(R 六三・七二)で採る場合と兩様がある。これは不統一であるし、使役であることを示さないなら、「悽悽傷我心」(R 九の「心」だけが單獨で(一〇五)〈心・感情〉に所屬している事實などと矛盾が生じるのではないだろうか。

次に修飾被修飾の關係にある言葉の取り扱いがある。「蓬蒿廬」(R 五九)は(一七六)〈建物〉に所屬する。しかしこの句と對になっている句の「藜藿食」は(二四〇)〈植物〉と(一七三)〈食物と飲み物〉に分けられている。「雙飛鳥」(R 一二)は(一〇二)〈二緒・組・仲間〉—(二四二)〈飛ぶ〉—(二三六)〈鳥類〉と一字ずつに分解されている。「飛鳥」(R 一三)も同様である。だが(一四二)には「飛」の他に「東飛鳥」(R 三六)、「南飛鸞」(R 五二)が、(二三六)も「鳥」と共に「飛鸞」(R 二七)が採られている。修飾の言葉を獨立させるのか、被修飾の言葉に附けるのかの原則に混亂があるように思われる。

この混亂は、動詞と下に續く目的語との關わりにおいて、やや目立つ。例えば「滅芬芳」(R 六七)は(二四四)〈芳香〉に所屬する。しかし、同じ(二四四)に屬している「微芳」(R 一九)の直前の動詞「振」は獨立して、(二四六)〈開く・始める〉に所屬する。他に(R 四二)の「須良輔」と對應する「俟英雄」は、前者はこの三字で(一九四)〈政府・宮廷〉に所屬するが、後者は(七七)〈待機〉と(一一一)〈立派な・勇猛心〉に分かれる。

これとは逆に目的語が動詞に附けられ、動詞の意味の項目に所屬させられている場合もある。(八四)〈類似・相違〉の「異支流」(R 七七)、(一四一)〈住む・滞在する〉の「宿明光」(R 七三)、「處非位」(R 七九)などで、それぞれ、(二二〇)〈川〉や「光耀」「光」などが屬する(九三)〈明り・輝き・光〉、「位」は仙界を示すから(二二九)〈仙界〉へと分けることができるのではないだろうか。

以上の疑問は索引を作る最初の作業に對して生じた問題である。第二點は次の段階、詩から採り出された語彙の所屬をめぐる疑問である。

まず典據に對する不注意と考えられるものがある。つまり含意の處置に關する問題である。(R五二)は「混沌」「倏忽」が登場する。メイヤー氏は(二三二)「宇宙的觀念・超自然的なそして高尚な主題」と(一六三)「突然・不意の」に所屬させておられる。しかしこれは諸家の註するように『莊子』の寓話に基づくと考えられる。この所屬はそれゆえ適切とは言えない。同じように(二二四)「雲」に屬する「朝雲」(R一一・C二七)も宋玉『高唐賦』を意識しているのであるから典據無視の所屬決定である。また(三三六)

「鳥類」は「銜羽」(R八)を採る。しかし「周周尙銜羽」と阮籍は羽根に水を銜ませて、相手に飲ませるということを言うのであり、むしろ(一七三)「食物・飲み物」の方がよかったのではないだろうか。

次に詩の中の意味と、所屬とがずれているように思われる言葉を幾つか學べておきたい。「玄髮」(R二七)は(二五)「老年時代・髮・老年のイメージとしての髮」に屬する。「素絲」「白髮」等が所屬することは理解できるが、「玄髮發朱顏」と女性の美しさを語っている句であり、下の「朱

顏」と同じく(二三)「若さ・美しい外觀」か、(十九)「女性たち」の方が適當なのではないだろうか。また(七七)「待機」も「携手等歡愛」(R一二)の「等」を採る。しかし著者自身がパート1の三、詩の英譯で“...were equal”とされるように、「ひとしい」の意味であらう。

また、先の第一點の疑問のところで、修飾被修飾の言葉の採り方の混亂を指摘したが、ここでは、修飾語と被修飾語が組み合わされてできた言葉の所屬に混亂があることを指摘したい。(九九)「高くそびえる・高く・急勾配」には「高樹」(R一四)、「喬松」(R四九)がある。一方(二四〇)「植物」に「修竹」(R四五)が採られている。このことは、同じ(二四〇)に仙界の山である西山を含む「西山草」(R八二)があつて、(二二九)「仙界」に「崑丘樹」(L四〇)があるということとともに、評者には多少奇妙に感じられる。さて、評者は以上の三つの疑問をこの索引に對し提出した。それらは互いに絡み合っており、獨立して述べたのは少々亂暴であつたかも知れない。ただ、言葉の採り出し方、詩における意味を持つ言葉のその意味の決定の原則、そし

て言葉の持つ意味をまとめて行く項目の設定、これらに對する疑問は、總てこの索引の大きな特色である、意味別の分類であるがゆえに生じたのである。意味分類はいわば諸刃の刀とも言えよう。

メイヤー氏は「私は方法論を確立するのが困難であることを發見した。」(序論)と、索引作製の苦心を表白される。それは四人の詩人が内省的で、解釋の難しい詩を作ったことも原因であろうが、この研究方法が從來にない、新しい研究方法であつたことに、より大きな原因があろう。しかし新しい方法であつたからこそ、何よりもまず、方法論の確立、つまり意味分類の原則の確立が、その原則に對する説明とともに必要であつたのではないかと、評者には思われる。

詩から言葉を探り出し、言葉の持つ意味を分類し、詩人達の共通性を探るという發想は主に中國の言語を研究しておられるメイヤー氏ならではのものではないだろうか。特に「歸趣求め難し」(『詩品』)と稱された阮籍の詩を分類してゆくことは、大變困難な作業であつたと思われる。

從來阮籍は、彼の生きた社會との關わりに重點を置いて研究されてきた。川合康三氏の「阮籍の飛翔」(『中國文學報』第二九冊・一九八八年四月)は、そのような流れのなかで、作品そのもののへのアプローチから阮籍を研究した最初のものであろう。メイヤー氏のこの著書は、むしろ阮籍のみの研究を目的としたものではないけれども、阮籍の研究に對して、川合氏に續いて新たな可能性を示しており、また、文學者相互の影響を調査するということについても、一つの方法を提示されたと言えよう。

メイヤー氏は緒論、序論において、この書を「實驗的」と謙遜しておられる。もちろんそれはここに紹介してきた、新しい研究方法に對して述べておられる言葉である。評者は力不足の爲、充分な紹介が出来なかつたことをお詫びすると共に、著者がこの研究方法により改良を加えられ、完成されることを期待したい。

(附記) 本書の著者メイヤー氏について、高田時雄氏より、お教えを受けました。ここに感謝致します。

(三重大學 道坂昭廣)